

19. 私たちの神、主が、私たちに命じられたとおりに、私たちはホレブを旅立ち、あなたがたが見た、あの大きな恐ろしい荒野を、エモリ人の山地への道をとって進み、カデシュ・バルネアまで来た。
20. そのとき、私はあなたがたに言った。「あなたがたは、私たちの神、主が私たちに与えようとされるエモリ人の山地に来た。
21. 見よ。あなたの神、主は、この地をあなたの手に渡されている。上れ。占領せよ。あなたの父祖の神、主があなたに告げられたとおりに。恐れてはならない。おののいてはならない。」
22. すると、あなたがた全部が、私に近寄って来て、「私たちより先に人を遣わし、私たちのために、その地を探らせよう。私たちの上って行く道や、はいつて行く町々について、報告を持ち帰らせよう。」と言った。
23. 私にとってこのことは良いと思われたので、私は各部族からひとりずつ、十二人をあなたがたの中から取った。
24. 彼らは山地に向かって登って行き、エシュコルの谷まで行き、そこを探り、
25. また、その地のくだものを手に入れ、私たちのもとに持って下って来た。そして報告をもたらし、「私たちの神、主が、私たちに与えようとしておられる地は良い地です。」と言った。
26. しかし、あなたがたは登って行こうとせず、あなたがたの神、主の命令に逆らった。
27. そしてあなたがたの天幕の中でつぶやいて言った。「主は私たちが憎んでおられるので、私たちがエジプトの地から連れ出してエモリ人の手に渡し、私たちが根絶やしにしようとしておられる。
28. 私たちはどこへ上って行くのか。私たちの身内の者たちは、『その民は私たちよりも大きくて背が高い。町々は大きく城壁は高く天にそびえている。しかも、そこでアナク人を見た。』と言って、私たちの心をくじいた。」
29. それで、私はあなたがたに言った。「おののいてはならない。彼らを恐れてはならない。
30. あなたがたに先立って行かれるあなたがたの神、主が、エジプトにおいて、あなたがたの目の前で、あなたがたのためにしてくださったそのとおりに、あなたがたのために戦われるのだ。
31. また、荒野では、あなたがたがこの所に来るまでの、全道中、人がその子を抱くように、あなたの神、主が、あなたを抱かれたのを見ているのだ。
32. このようなことによってもまだ、あなたがたはあなたがたの神、主を信じていない。
33. 主は、あなたがたが宿営する場所を捜すために、道中あなたがたの先に立って行かれ、夜は火のうち、昼は雲のうちにあつて、あなたがたの進んで行く道を示されるのだ。」
34. 主は、あなたがたの不平を言う声を聞いて怒り、誓って言われた。
35. 「この悪い世代のこれらの者のうちには、わたしが、あなたがたの先祖たちに与えると誓ったあの良い地を見る者は、ひとりもない。
36. ただエフネの子カレブだけがそれを見ることができる。彼が踏んだ地を、わたしは彼とその子孫に与えよう。彼は主に従い通したからだ。」
37. 主はあなたがたのために、この私に対しても怒って言われた。「あなたも、そこに、はいれない。
38. あなたに仕えているヌンの子ヨシュアが、そこに、はいるのだ。彼をカづけよ。彼がそこをイスラエルに受け継がせるからだ。
39. あなたがたが、略奪されるだろうと言ったあなたがたの幼子たち、今はまだ善悪のわきまのないあなたがたの子どもたちが、そこに、はいる。わたしは彼らにそこを与えよう。彼らはそれを所有するようになる。
40. あなたがたは向きを変え、葦の海への道を荒野に向かって旅立て。」

- 4 1. すると、あなたがたは私に答えて言った。「私たちは主に向かって罪を犯した。私たちの神、主が命じられたとおりに、私たちは上って行って、戦おう。」そして、おのおの武具を身に帯びて、向こう見ずに山地に登って行こうとした。
- 4 2. それで主は私に言われた。「彼らに言え。『上ってはならない。戦ってはならない。わたしがあなたがたのうちにはいないからだ。あなたがたは敵に打ち負かされてはならない。』」
- 4 3. 私が、あなたがたにこう告げたのに、あなたがたは聞き従わず、主の命令に逆らい、不遜にも山地に登って行った。
- 4 4. すると、その山地に住んでいたエモリ人が出て来て、あなたがたを迎え撃ち、蜂が追うようにあなたがたを追いかけ、あなたがたをセイルのホルマにまで追い散らした。
- 4 5. あなたがたは帰って来て、主の前で泣いたが、主はあなたがたの声を聞き入れず、あなたがたに耳を傾けられなかった。
- 4 6. こうしてあなたがたは、あなたがたがとどまった期間だけの長い間カデシュにとどまった。

説教

申命記 1 章 19 節以下では、イスラエルが四十年間荒野をさまよわざるを得なかった理由が、モーセの口によって回想されます。

エジプトを出て、シナイ山で十戒を中心とする律法を教えられたイスラエルは、約束の地カナンのお手前、カデシュ・バルネアに到着します。そこで、カナンに突撃しよう神から命じられるのですが、イスラエルの民が尻込みして突撃命令に従おうとしないため、神の怒りを買って、カナン入りをお預けにされてしまいます。それどころか、命令に従おうとしなかった者たちは、誰ひとり約束の地に入ることを許されず、ひとり残らず四十年の間に荒野で死に絶えてしまいます。そうして、神に打たれて荒野で死に絶えた父の世代を反面教師にしながら、次の世代が父の屍を越えて、カナンを占領し相続することになるのです。

既にこの時には不信仰な第一世代は残らず死んで、ヨシュアとカレブ、そして今遺言を語り終えて死のうとしていたモーセが生き残るのみとなりました。モーセはここで、まさに死力を振り絞って、かつて犯した自分たちの最大の失敗を次世代に語り告げます。すなわち、神の約束の地カナンに入れず、四十年間荒野をさまよわされた原因です。言うまでもありませんが、モーセがここであらためてかつてのことを回想し総括しているのは、新世代の者たちが二度と同じ過ちを犯すことがないように、教訓として肝に銘じておくためです。

そこで、既に民数記で学んでことではありますが、私たちもまたあらためて問題点を整理して、私たち自身への教訓としましょう。

端的に言って、一体何が原因でイスラエルは四十年間も荒野をさまよわされ、約束の地を相続することなく、荒野で死に絶えてしまったのでしょうか。要するに、それは彼らの不信仰のためです。「不信仰」というのは「神への不信仰」です。それは、より明確に表現するなら、「神の約束を信じない不信仰」と言えます。

一連の経過を見てみましょう。

カデシュ・バルネアで、モーセは神の約束をあらためて宣言します。「見よ。あなたの神、主は、この地をあなたの手に渡されている。」(21) カナンは、元来、彼らの先祖アブラハムに神が与えると約束した地でした。ヤコブの時に飢饉で一時的にエジプトに避難することになり、その後 430 年間エジプトにいた後、出エジプトします。エジプト脱出の理由は約束の地カナンを相続するためです。カナン相続は先祖アブラハム以来の神の約束であり、同時に民族の悲願でもありました。それでモーセは、こう力強く、確信に満ちて宣言したのです。「見よ。あなたの神、主は、この地をあなたの手に渡されている。」そして、こう命じました。「上れ。占領せよ。あなたの父祖の

神、主があなたに告げられた通りに。恐れてはならない。おののいてはならない。」(21)

神の約束は、必ずその通りに実現します。神が一度語られたら、だれもそれを止めることはできません。神の約束は、あらゆる妨害を打ち破って、100%成就するのです。だからこそ人は、神の約束が成就するのかもしれないのかと詮索したり、不安に思うことなく、恐れず、おののかずに（挫けず、失望せずという意味）、神の命令通りに、まっすぐ「上り、占領」しなければなりません。

モーセの命令と激励を受けて、イスラエルの民はまずカナンへの斥候隊を遣わすことを提案して、受け入れられます。そして斥候隊は、カナンの豊かな果物を持って来ては、約束の地が「良い地」だったことをまず報告した後、文明が発達し強そうなカナン人の餌食になって「根絶やし」にされると報告して、人々の「心をくじいた（溶けさせるという意味）」のでした(28)。「主は私たちが憎んでおられる」のでカナン人の餌食にしようとしているのだと、神の愛と善意まで疑って、悪く言いふらす始末でした(27)。

これに対し、モーセはさらにイスラエルの民を励まします。「おののいてはならない。彼らを恐れてはならない。あなたがたに先立って行かれるあなたがたの神、主が、エジプトにおいて、あなたがたの目の前で、あなたがたのためにしてくださったそのとおりに、あなたがたのために戦われるのだ。」(30) 民はカナン人の強さを恐れましたが、しかし実際に戦うのは民ではなく彼らの神ご自身であり、その神がどれほど強いお方であるかはイスラエルが目の当たりにエジプトで目撃して誰よりよく知っているはずだ、だから恐れる必要など無いとモーセは民を説得します。

そして神は、出エジプトの際に、当時最強のエジプト軍を撃破したのみならず、出エジプトしたイスラエルの民を荒野でカデシュ・バルネアに至るまでの「全道中」ずうっと守ってくださいました。イスラエルは未だ奴隷上がりで幼く弱く未熟な「子ども」であるにもかかわらず、神は「人がその子を抱くように」守ってくださったのではないかと実に適切な表現で説得します。そしてさらには、神はイスラエルの民に「先立って行かれ」、「夜は火のうち、昼は雲のうちにあって」行く道を示してくださったというのです。

つまり、以上をまとめるとこうなります。まず神は、イスラエルにカナンの地を与えると約束してくださいました。これだけで充分なのですが、敵の強さにおののき尻込みしている民に、戦うのは彼らではない、神が先立ち彼らのために戦われるのだ、と励まします。その神は彼らの目の前で最強のエジプトを撃破した神であり、同時に何もない荒野で天からマナを降らせて彼らを養ってくださったお方で、幼い乳飲み子の親のように神は我が子イスラエルを昼も夜も全面的に守り養ってくださったからここまで来ることができたのではないかと説得するのです。神は口で約束するのみならず、最強の力と愛で、全く非力で弱い幼子イスラエルを、手取り足取りというより全く全面的に守り支え養いながら、約束したことをその通りに実現してくださると言うのでした。

このモーセの励ましは、これ以上励ましようがないほどの最高の説得でした。自分たちの力の無さを嘆く民に、確かに自分たちは弱いものの神は全能で最強であり、その神が父として自分たち我が子を全面的に守り助けてくださったし、これからも助けてくださる、神の約束は必ずその通りに実現する、と言うのです。

しかし、ここまで説得されたにもかかわらず、イスラエルの民は神の約束を信じませんでした。それどころか、「主は私たちが憎んでおられる」のでカナン人の餌食にしようとしているのだと言い放つ始末です。彼らは、神の愛を信じることなく、神は悪意に満ち、自分たちをカナン人の餌食にして根絶やしにしようとしていると言うのです。父としてのこの上ない愛をもって子に与えようとしている祝福を、そんなものはいらないと足蹴にしたのです。それは、一言で言えば、彼らの「不信仰」でした。「神への不信仰」、すなわち「神の約束を信じない不信仰」です。モーセの表現を借りると、「このようなことによってもまだ、あなたがたはあなたがたの神、主を信じていない」のでした(32)。ここまで良くしていただいたにもかかわらず、未だ神を信頼できないとするならば、この先永

久に神を信頼することはできません。

信頼こそ、あらゆる人間関係の土台であり基礎です。信頼関係の崩壊は、そのまま人間関係の崩壊を意味します。ひとたび信頼関係が崩壊するや、友人関係は崩壊し、夫婦関係は崩壊し、家庭は崩壊します。同様に、人が神に対してなすべきは、何よりもまず神を信じることです。それは神の約束を信じることです。約束の地を相続させてくださると約束してくださったならば、その通りに必ず相続させてくださるのです。どんなに敵が強くても、どんなに自分が非力で弱々しく幼稚で愚かでも、神は全能です。世界最強です。そして、憐れみに富んでおられます。私たちの父として子である私たちを限りなく愛してくださっています。だから、神の力が、神の愛が、神の愛の力が、あらゆる妨害を打ち破って、その通りにお約束を実現してくださるのです。この父なる神の愛を信じること、そして、その愛に満ちた約束を信じること、それが「信仰」であり、私たち人間にとって何よりも大切なことです。

そして、この神の愛と約束を信じて、「上れ。占領せよ。」との命令に従わなければなりません。誰よりも私たちを愛してくださっている父なる神が、カナンという祝福に満ちた相続地を与えてくださると約束した上で、「上れ。占領せよ。」と命じておられます。それはカナン人の餌食にするためでは断じてありません。祝福に満ちた約束の地を本当に相続させてくださるためです。父なる神は、御自身の民を愛しておられるのです。

悪く言いふらした斥候隊はその場で即座に打たれて神に殺され、残りの咬いた者らも四十年かけて荒野で死に絶え、さらには彼らのとぼっちりを受けてモーセまでがカナン入りを許されないことが宣告された中で、神はカレブとヨシュアだけはカナン入りできると確約なさいます(34-38)。そして、その理由を「彼は主に従い通したからだ」と神は解説なさるのです(36)。直訳は「主の後ろにあること(あるいは服従)を全うした(満足させた・満ちた・成し遂げた)から」です。彼らは先立つ神を仰ぎ見、神に全幅の信頼を寄せて、神に全面的に聞き従いました。他の民は、自分勝手に生きて、神を信じることなく、神の命令に従いませんでした。しかしヨシュアとカレブだけは、神の約束をそのまま信じてご命令に従います。そしてそれは、神を完全に満足させるものとなります。彼らだけが神の約束の地を相続することとなるのです。彼らが信頼したのは神です。神の力です。神の愛です。彼らは、自分の非力さを見ることなく、ただ神を信じました。神に頼りました。

皆さん。自分の能力の範囲内で頑張るというのは、一見もっともなようですが、それは信仰ではありません。自分のできる範囲で努力するというのは、信仰ではありません。自分の力の中でと言うならば、私たちは何もできません。私たちは「赤ん坊」なのです。何も知らない、何もできない、それが「赤ん坊」です。信仰は、私たちの能力と常識と限界を超えるものです。なぜなら、私たちが信じるのは神だからです。私たちが生きるのは、自分の力によってではなく、神の知恵によって、神の力によって、神の能力によって、生きるのです。だから、自分ができるかできないかではなく、神ができると言えばできます。勿論、神ができないと言えばできません。すべては神の約束によります。これが信仰です。自分中心ではなく、神中心、神絶対なのです。

ヨシュアとカレブは神を信じました。「彼は主に従い通した」と神に認められて、神に満足され、喜ばれました。私たちもまた、ヨシュアとカレブのように、「彼は主に従い通した」と神が認めて神を満足させる本物の信仰を全うするものになりたいと願います。そして彼らのように、神が約束された永遠のいのちと祝福に与りたいと心から願います。